

## 巻頭言

「探査」と言うと、遊星人の読者の皆さんは9割以上の方々が「惑星探査」と連想するだろう。私の場合「惑星探査」もあるが、「隕石探査」もあり、およそ半々の感覚だ。しかし、これまで、その場・その時の状況でその割合は少しずつ異なって来た。直近は、小惑星リュウグウ試料の分析にどっぷりのために惑星探査の方が優勢である。逆にその前の10年ほどは隕石探査の方が優勢であった。2012-2013年に第54次南極地域観測隊(夏隊)として南極セル・ローンダーネ山地でのあすか隕石の採集から始まり、2019年に韓国隊に同行した南極エレファント・モレーンでの隕石採集があったからだ。ただし、リュウグウ試料の初期分析は試料帰還の前からももちろん準備が始まっていたし、およそ10年前の南極隕石探査の際は、ほぼ同時並行で小惑星イトカワ試料の分析があった。場面場面では、惑星探査も大きなウェイトを占めていたのである。さらに、その前の2006年に降しばらくはNASA スターダスト探査によるWild 2彗星塵の分析があったので惑星探査が優勢だったが、2000年頃はアメリカ・テキサス州/ニューメキシコ州の砂漠地域での隕石探査に凝っていた時期で、隕石探査の方が…と言うような状態である。つまり、両者は入り混じっているのである。私個人としてはこの状況を楽しませてもらっているし、長い目で見て両者がおよそ半々ののが理想的な状況では無いかと考えている。

惑星探査も隕石探査も、惑星科学を推し進める上では非常に重要な役割を担っていることは言うまでも無い。特に物質科学的な側面の惑星科学では、隕石探査の重要性は非常に高いのは明らかだが、昨今はやや軽視されている気がする。これまでに、特に南極での隕石探査により回収された南極隕石から多くの新しい知見が得られてきたこと、そして、それは将来の隕石探査でも期待できることは留意しておくべきだろう。そのような知見がサンプルリターンも含めた惑星探査の基礎となって来たのだから。

要は、惑星科学、特に惑星物質科学をより健全に発展させて行くためには、惑星探査と隕石探査の2つの「探査」を両輪として、バランスよく研究の推進を行うことが肝要に感じる。

三河内 岳(東京大学 総合研究博物館)